
アリスの鏡界線

桜乃木咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスの鏡界線

【Nコード】

N9381Y

【作者名】

桜乃木咲

【あらすじ】

コンビニからの帰路につく最中の「鏡宮 一就」（かがのみや いっしゅう）は女の子が倒れそうになっているところを助ける。彼女は「アリス」と名乗り話を聞くと彼女は鏡の世界からやってきたと言う、それと同時にアリスを狙う第一の刺客が現れる。

彼はこの日からいつも送ってきた日常には戻れないと言う事実と共に数々の刺客達と対峙しなければいけないことに！

そして彼の中に潜む隠された事実とは……

桜乃木 咲が送る「アリスの鏡界線」をお楽しみに。

第一章

「まったく、人使いが荒いにも程があるぞ」

とある夏の夕刻、人通りの少ない道をひたすら歩く俺こと鏡宮一就は妹に頼まれた物をコンビニで購入した帰り途中であった。かがのみやいっしゅう

さすがに夏なだけに体は汗ばみTシャツが肌にくっついて気持ち悪いったりやありやしない。

「あー……風呂入りてえなあ」

手に持つうちわで顔を扇ぐも全然効果などなく逆に体力を消耗していくだけであった。

閑静な住宅街を暫く歩くと薄暗い林道に入った。

この先が俺の実家でもあり鏡の供養をしている「鏡宮社」（かがみぐうしゃ）と呼ばれるそれなりに由緒ある社がある。

話はずれたが、その林道に入ったところで俺の目の前にふらりと一人の人影が目に入った。

「？」

俺は目をしかめてジッと見る。

「……女？」

女は足取りがおぼつかずにふらふらと俺に向かって歩いてくる、暫くすると目が暗闇に慣れ始めると女は随分と疲弊しきっている様子で尚且つ衣服は破れそれはもう見るに見かねない状態であった。

「あ、ちょ！ 大丈夫か！」

「うっ、うっ……」

驚いた俺は手に持っていた袋を思わず落とし女に駆け寄ると女を抱きかかえる、女は大きく息を漏らすと安心したかのように気を失った。

何か事件に巻き込まれたんじゃないかと辺りを見渡すが誰かがいる様子もない、傷の手当をしないといけなさと考えた俺はとりあえ

ず実家に連れて行くことにした。

「ただいまー」

「お兄ちゃんおかえりー、ってどうしたの!？」

両手が塞がっていたので足で玄関を開けると妹の鏡宮鈴が廊下をあわただしく走りよつてくると同時に目を真ん丸くして驚く。

「ああ、家の付近で助けたんだ」

「ちょ、ちよつと待ってて! お母さん呼んで来るから!」

「ああ、頼む。」

それと俺の部屋はまずいから客間に布団敷いて寝かせてくるわ」

鈴にそう告げると俺はとりあえず客間に布団を敷いて女を寝かせる、暫くすると鈴と母が部屋に入ってくる。

「一就どうしたの!？ この娘をどこで？」

「ああ、付近で倒れそうになつてるところを助けたんだ」

「そう、大きなケガは？」

「いや、大したことはないと思うが」

「お兄ちゃん、この人の体を拭いて着替えさせるから部屋出て行つてくれる？」

「ああ、頼むわ」

俺は暫く部屋から出て自室へと戻り汗ばんだ服を脱ぎ着替えを済ます。

すると――

――コンコン

ノックする音が聞こえると俺は「どうぞ」と部屋に入るように促すとそつと鈴が顔を出す。

「どうだった？」

「うん、だいぶ落ち着いて今は寝てるよ」

「そうか、それなら良かった」

「私てつきりお兄ちゃんが犯罪でもしてきたのかと思っちゃったよ」
「んなわけあるか！ 失礼な妹だな！」

「あはは、あ……そうそうお兄ちゃん」

「んー？ なんだ？」

「あの人どうするつもりなの？」

「んー……明日になれば一応家に帰るように促しては見るが、謎が
けっこうあるんだよ」

「？ 例えば？」

「まず一つになぜ俺の家の付近だったのか、もう一つは何があった
のか」

「あー、そうだよな。」

だいぶ疲れてたみたいだし、疲れぶりからして何かの事件に巻き込
まれていてそれから逃げる最中だったかも知れないしね……それに
最近この辺もだいぶ物騒になってきたしね」

「うん」

それから三十分ほど妹とそんな話で費やし気づくと午後二十時を
回っていた。

「あ、もうこんな時間か。」

鈴、悪いけど俺そろそろ」

「あ、そっかお役目の時間だもんね」

「今日はまたなんか新しい鏡がきたみたいだし行ってくるわ」

「うん、お兄ちゃんががんばってね」

「おう」

俺は妹にそう告げると早々に話を切り上げ鏡宮社の本堂に足を運
んだ。

これは俺の仕事なのだが毎日決まった時間になると決まって本堂
へ赴き鏡の供養を行わなければいけなかった、その仕事は本来この
社の住職である父鏡宮義総かがのみやぎそうが行っているが父も人間疲れが溜まるの
でここから数時間は俺の務めになっていた。

「失礼します」

ふすまを開けると父が正座で鏡に向かい合っているが俺の声と共に向きかえると笑顔を向けた。

「おお、来たか待っていたぞ」

「父さん、実は——」

俺は先ほどの出来事を話すと父は目を輝かせてとても嬉しそうな表情を浮かべた。

「そうかそうか、お前もついに人として全うなことをしたんだな！父さんは嬉しいぞ！」

「おい、その言い方じゃ普段俺が全うな人間じゃねーみたいじゃねえーか」

「はは、そう聞こえるか？ まあ、いい。

それよりもここからは任せたぞ」

「はいはい」と

「ああ、それと……」

「？」

父は部屋から出る寸前のところで俺に話しかける。

「そこに置いてある鏡だが何か不穏な気が感じられる、お前で手が余るようなら再度呼んでくれ。

ああ、あと女の子……可愛かったか？」

「知るか！」

父は「冗談だよ」と言わんばかりに高らかと笑い飛ばしながら部屋を出て行った。

「……………」

俺は父がいなくなるのを確認するとそつと後ろの鏡台に置かれた鏡に視線を向けた。

「いたって普通の鏡だよな、これの何に気をつけると——」

俺はスツと座布団から体を起こすとそつと鏡台に添えられた鏡に手を伸ばすと——

「な！　なんだ！？」

急に鏡が光りだす、俺は思わず後ずさりをする。

「今までこんなことなかったのに」

光り輝く鏡はどことなく神々しさ……と言うよりも禍々しさすら感じさせられた。

今までにないこの事態に対応できないと感じた俺はとりあえず部屋から出て父を呼ぼうと思ったが次の瞬間自らの目をも疑わざる終えない光景が目の前で起こった。

「……………」

俺は息を呑む、目の前には金髪のツインテールの年は俺と同じ……いや、あるいは俺より一つ二つほどだろうか上に見える少女が現れていた。

俺は目を擦ってみるがその光景は変わらない、俺はとりあえずどうしていいのかわからないし動くこうにも体が思うように動いてくれない。

「……………」

目の前に現れた少女がそつと目を開けると俺のことが目に入ったのか近づいてくる。

「なんだ？　お、お前どこから？」

やっと口から声を出すことができた、が次にはまたもや信じられないことが起こった。

「！？」

少女はどこからともなく銃を取り出しその銃口を俺に向けてきたのである。

俺は全身が恐怖で支配されまともに動けない、そんな姿をみた少女は不敵に笑みを浮かべて少しずつ俺に近づいてくる。

そして俺も必然的に彼女がこちらに来るとそれと同じくらい後ろに逃げようとする。

「貴方かしら？　ここに私を連れてきたのは」

「――！？」

少女は訳のわからないことを言っている、俺はココの住職の息子だぞつと言いたかったがうまく口で話せない。

「へえ、私を恐れているのね人間」

そりやそうだ、怖いに決まってる大体鏡から出てきて「こんばんは」なんて言えるかよ。

どう見てもストーカーとかそこらへんが一番お似合いだぜ……。

「ふむ、お前はどうかやら私をここに連れてきた張本人ではなさそうだな」

少女は俺を壁際まで追い詰めるとスツと前かがみになり俺の顔に顔を近づけてくる、近すぎるだろ。

「まあ、いい……それよりもここはどこだ？　私はエルメリア聖堂にいたはずなんだが？」

「こ……ここは俺の家で鏡宮社って言う鏡を供養する神社だ」

やっと会話ができるぐらいになる、彼女が話の通じる相手だったせいであろうか少し安心する。

「そうか……で？」

「で？」ってなんだよ……会話終了じゃねーか。

暫くすると廊下が慌しくなる、少女は反射的にだろうか銃を再びどこからか出して身構える。

「ちよつと！　お姉さん！」

騒がしい中で妹の鈴の声が聞こえると同時にもう一人見覚えのない女の声がある。

開いたふすまから妹と先ほど助けた少女が姿を現した。

「鈴！　あぶねーから下がってる！」

「でもお兄ちゃ……って誰？　この人」

「……………」

鈴は驚きを隠せずにいる、また先ほど助けた少女もすごく驚いているようでうまく声をだせていない。

「あら？ アリスじゃない、こんなところにいたのね」

「……どうして？ ここに？」

見るからに顔見知りのようだ、ってことはアレか？ この二人は共に鏡の中から？ ってさすがにねーか。

「随分と探したのよ？ しかも探している最中になんかこんなへんぴなところに連れて来られてるし」

「あの、一ついいか？」

思い切って俺は鏡から出てきた少女に話しかけてみる。

「ん？ どうしたのかしら？」

「あ、いやこの人は俺がちよつと前に助けたんだけど……」

「あら？ そうなの？ でも残念ねえ……私はこの人アリスって言うのだけれど破壊しに来たの」

は？ 意味がわかんねーぞ破壊？ 人間じゃないって言うのか？

「一体なんなんだ？ お前ら」

「お兄ちゃん、警察呼ばないと」

そつだ、妹をそつちのけだった。

とりあえず俺は体を起こし妹にかけよると鈴は俺の後ろに隠れるように顔だけを出していた。

「鈴、お前は外へ出てろあと父と母にも外にできるように言っとけ」

「う……うん、でもお兄ちゃんは？」

「俺はここに残り状況を把握する、じゃないと対応に困るだろう？ いいから早く行け！」

俺は妹や家にいる両親を外に出すように言いつけると俺、アリスと呼ばれる少女そして鏡から出てきた不振人物の三人が互いに向き合うような格好になった。

「でだ、お前達はいつたい……いや、それよりも破壊ってどーゆー事だ？」

「そのままだの意味ですわ、まあ？ 彼女はもう抵抗する力もないようですし私としてはちゃちゃっと終わらせたいのですけれど」

不振人物はそう言うと言口を彼女に突きつける、こんな場所です

殺しなんてさせるものかとつい勢いのままに彼女の前に仁王立ちになる――が

――しまった！　　と思ったがもう遅い。

このままじゃ俺が蜂の巣じゃねーかと思ったが後の祭りだ、どうしようもない。

「どいていただけるかしら？　それとも何か？　王子様きどりでもしているのかしら？」

「……俺は目の前で人殺しなんてさせてやるほど腐った人間じゃねーんだよ」

（くぁー！　何言っただ俺！　このままじゃ守るところか犬死にじゃねーか！）

そう思ういながらも俺はなんとか逃げる手立てを考える、だが逃げ道は俺の後ろの廊下しかない。

だったら選択肢は一つ！

「逃げるぞ！」

そう言っただ俺は彼女の手を掴んだ瞬間だった、突然俺達を繋ぐ手が光りだしたかと思うとその光は全体を包み込んだ。

その次には俺にはまたもや信じられない光景が目の前に広がっていた。

第一章（後書き）

こんばんは、もともと製作していた「魔に狂いし鏡の国のアリス」でしたが作品そのものをイメージを転換・再編集と言う形で作品名を新たに変更して生まれ変わりました。

新作品名「アリスの鏡界線」になり、こちらで続きも書いていきますと思います。

主人公もベタ？って言うくらいの口は悪くても心根は優しく正義感溢れる感じの好青年なので愛してやってくれとありがたいです。また、本来主人公設定だった「鏡乃亜莉栖」が「鏡宮アリス」になり追う立場から追われる立場へと真逆のイメージになりました。

これから鏡の世界と現実世界を行き来する主人公達やそこで起こる出来事に期待に胸を躍らせていただけるといいなあっと思います。これからもよろしく願いいたします。

第二章

俺は彼女アリスと呼ばれた少女の手を握ると突然俺たちの手から光が現れる。

「……!?」

その光は次第に大きくなり俺やアリスを包み込む、しかしそれも束の間で今度はその光は次第に勢いを弱めて次には光が消えた。

「いったいなんだったんだ……ってなんだそれは!？」

俺は自分の目を疑った、アリスは今まで白のワンピースだったのが黒いゴシック風の衣服を身に纏い手には死神を連想させるような大きな鎌を携えていた。

「な、なんですか？ これはいったいどう言うこと？」

不審者も驚きを隠せないでいる。

「! これは鏡衣! もしかして君が？」

「いや、わかんねーけど……」

俺に問いかけるアリスだったが俺にも事情がのみこめない。

アリスは母に巻いてもらった包帯を解き白い透き通ったような肌を晒すと傷もなくなっていたことにさらに驚いていた。

「なるほど……アンタ普通の人間じゃないわね？ まさか……ハンプティの持ち主かしら？」

ハンプティ？ またもや意味のわからないことを口にする不審者。

「……あ、ありがとう」

「え？」

「この力は間違いないわ、これでまた戦える！」

アリスはそう言うのと部屋を飛び出すと鎌を振りかぶる、俺は一体何が起こったのか状況が把握できずに混乱していた。

「どう言うことだよ！ わけがわかんねーよ！」

「鏡宮一蹴って言ったわよね？ あとで説明するから先にその子を撃退するわ」

鈴か母に教えてもらったのであろうか？ 俺の名を呼ぶアリスは
そう言つて不審者撃退の意思表示をする。

「おもしろい、存分に相手してあげるからかかってこない」

挑発的な目を浮かべ不敵に微笑む不審者。

「すぐく力が溢れてくるわ……これがハンプティの力なのね」

「アリス、アンタごときがこの私を倒せるとでも思っているのかしら？」

「さあ？ どうかわかんないけれどやってみる価値はありそうよ？」

「減らず口叩くのね……まあ、いいわ」

二人は互いに間を取り合う、俺は被害が及ばないように家を背にして二人を見守ることにした。

――が

一向に決着がつく気配がまったくしない、俺はただ二人のやり取りを見ているしかできなかった。

（今日は月が出てるな……）

つかそんなのん気なことを思う俺、なんだろう……俺って主人公だよな？ めっちゃ蚊帳の外なんだけど。

そこへふと俺が座つてる隣にあるものがあることに気づいた。

（人形？）

そうそこには黒いうさぎのヌイグルミがあつた、俺はおもむろにそのヌイグルミに手を伸ばそうとすると――

『気安く触んじゃねーよ、ボケがあ』

「！？」

こともあろうかヌイグルミが喋つたのだ、俺は夢を見ているのか頬をつねってみる。

「いてえ！」

『夢じゃねーよ、お前ハンプティの持ち主だよな？』

まただ、今日は一体なんの日だ？ アレか？ ハロウィンか？

「その、お前は誰だ？　なんで人形が？」

『は！　そんなことあどーでもいいんだよ！　それよりもアリスを復活させたのはお前なんだな？』

「あ……ああ、そうらしい」

『そうか……ついに足をつっ込んだか』

「なあ、説明してくれるか？　俺にはまったく何が何やらわけがわからねーんだよ」

『ふむ、それもそうか。』

じゃあ、説明してやるから耳をかつぽじってよく聞いておけよ』

なんで又イグルミのくせに上から目線なんだよ、ちっせーくせに。俺は黒いうさぎの言うことに耳を傾けると説明を簡潔に告げる黒うさぎ。

話をきくと簡潔的にはこうだった、まずは今日の前にいる二人はアリスとリリノアと言い二人は共に鏡の中の住人なのだそうだ。

その鏡と言うのは人を映すだけのみの鏡が大半を占めるものの中にはこうして俺たちの現実世界と別世界を通じるいわゆる「扉」のような役割を持つ物もあるのだそうだ、そしてこの黒うさぎもその住人で二人が現実世界に現れたことによつて召還されたと言っている。

要するにこいつは二人の監視役と言ったところなのだろうか？

ではなぜここに？　と言うことなのだがどうやらアリスはその向こう側の世界の実質的支配者である「赤の女王と赤の王」に歯向かい現実世界に追放になったらしいのだがその際に現実世界にていくつかのハンプティが確認されることになりその回収及び破壊を行うために刺客を送り込むことにした。

そしてそれと同時にアリス本人がそれを手にするまたは保持者との接触を阻むこともその内容に含まれ、万が一にでも手に入れるまたは保持者との接触があつた場合は消して構わないと言う指令が下されていたようだった。

「なるほどね、話は大体わかった。

ではハンプティとは一体？」

「ハンプティHumptyとは向こう側の世界では魔力の卵と言われもするが通常の人間では扱えない代物なのだ、ただ中にはその扱いに強い出る者もいると言う可能性の中で回収を急いでいるってところか。」

「ではそれがなぜ俺たちの世界に？」

「それは私様もわからん、ただ誰かが故意的にしる流出させている可能性もあるってことだな。」

「とりあえずお前もその所持者の一人に過ぎないってことだ」

「……………」

俺は天を仰ぐ、なんて俺は可哀想な子なのだろうと思わず涙するところだった。

「わかった、ただ俺は言っておくがそんなもの持っちゃいねーし回収するのなら喜んで差し出すよ。」

その代わり俺を普通の日常へ返してくれよな」

当然だ、俺はそんな生死に関わるようなことから一刻も早く抜け出したいんだ。

「そうだな、君がそう言うのなら私様個人としては喜ぶところなのだが……まあ、アリスはどの道死ぬことになるだろうな」

「！？」

「そりゃそうだろう？ もともとリリノアの目的はアリスの抹殺及び記憶からの削除がそうなのだから。」

無論、君には関係のない話になるだろうけどな」

アリスが……そうか……確かにそう言うことだったな。

「ああ、ちなみにハンプティは君の右腕に埋め込まれているよ。」

回収するなら右腕を切り落とす以外の方法はない訳なのだが……それでも構わないか？」

うさぎは無表情だったが俺から見ればすごく不気味に笑っているように感じられ身震いをした。

切り落とす？ 冗談じゃねえよ、なんで俺がそんなことされなきゃなんねーんだ。

「冗談じゃねーよ、右腕を切り落とした拳句にアリスも殺される？
なんだよそれ……」

意味わかんねーし笑えねー」

『そりやそうだろうね、お前もアリスも何の得にもならないからな
じゃあ、どうすればいいか……わかるよな？』

「……………」

俺は両手で頭を抱え自分の運命を呪った。

『お前に与えられる選択肢は二つ。

右腕を差し出しアリスを殺されて開放されるか、またはお前がアリスを助け尚且つこの指令が行き渡っている刺客どもを倒し続けた上で向こう側の世界の主を倒すか……どちらかだ』

「……………」

『ん？ どうした？ 怖気づいたか？』

「だー……！！！！ わぁーっ たよ！ 選択肢がそれだけしかねー
のならやることは一つだろ！

俺には見殺しにするつもりもねーし右腕を差し出すつもりもねー、
だったら俺の運命は俺で変えてやる！」

もう考えるのもめんどくさくなった俺は吹っ切れたように黒うさ
ぎに言い放つ。

『そーかい？ だったら私様は高みの見物といかせてもらおーかね』
俺は黒うさを置いて一人戦っている少女達のもとへと歩を歩め、
アリスを背にノノリア目の前に立ちはだかった。

「一就さん？」

「お前は俺が守ってやる！ 見殺しにはさせねーよ」

「……………でもそれじゃあ」

「心配すんな、俺にはハンプティがあるんだろ？ だったらなんと
でもなるさ」

不思議そうに俺を見るアリスに対してもうどうにでもなれだと言
わんばかりに言い放つ。

「アリス、一つだけいいか？」

「え？」

「ハンプティの使い方教えてくれ、じゃねーと俺もお前もただじゃ済まねーからな」

「それで本当にいいの？」

「俺の目の前で前が殺されるなんてまっぴらごめんだし？ それに俺の好意を無駄にされちゃたまったもんじゃねーからな」

「……わかった」

「何をごちゃごちゃ言ってるのか存じませんが、邪魔しないでいただけますか？」

冷やかな目を俺に向けるリリノア、しかし俺とアリスはお構いなしに話を続けた。

「長話はできないけれど、ハンプティは魔力の卵と呼ばれています。一就さんの場合はすでに体中に魔力の脈が出来ているようなので使おうと思えばすぐにでも使えます」

「じゃあ、どうやって？」

「簡単です、ハンプティは所有者の意思を通じて発動します。

一就さんがこうしたいと念じさえすればどんな形であれハンプティが反応します、ちなみにこれらは私達向こう側の世界の住人と同じハンプティ所有者のみしか適用されませんのであしからず」

「……わかった、やってみる」

「それじゃあ、行きますよ？」

アリスは瞬時に動くリリノアの元へと間合いを詰める、対してリリノアの使用武器は遠距離銃なので近接に持ち込まれると危ういことは必須なので距離をとろうとする。

二人は再び一進一退を繰り返し互いに譲らない状態が続く。

「ねえ、アンタは私を楽しませてくれるのかしら？」

リリノアは俺に話しかける、見るからにまだ余裕がありそうだ。

「くっ」

俺はふとアリスを見るとやはりまだ完全ではない様子で少しでは

あるが肩があがっている、あまり長引くと不利だと思った俺は全身の力を抜き頭を集中させた。

考えろ、今あいつを止めれる方法を……何か。

そうしているうちにも徐々に押され始めるアリス、しかし次の瞬間アリスは大きな銃撃の音と共に庭に配置されていた岩に向けて吹き飛ばされる。

「ぐあー!!」

「アリス！」

「あはは、これまでのようですわねアリス」

リリノアは倒れたアリスの腹を踏みつけ銃口をアリスの顔に向けた瞬間に俺は焦った、このままでは彼女は殺されると思ったからだ。
「う、うおおおおおおお！」

俺は必死だったのでこの一瞬で何が起こったのか理解できなかった、一言で言うならキレたと言っても過言ではないのであろう。

「一就さん!？」

「お前!？」

ここで俺の意識はプツンと途切れたのであった。

第二章（後書き）

さて、第二章をご覧ください。方ありがとうございます。

また初めてと言う方はじめまして、桜乃木 咲と申します。

いつもありがとうございます。第二章と言うことで投稿させていただきます。

この章では主人公は自らの中に「ハンプティ」が埋め込まれていることを黒うさぎに教えられるんですが、私も幼少の頃に読んだ「不思議に国のアリス」やその続編である「鏡の国のアリス」に現れる「ハンプティ・ダンプティ」を元として登場させました。

注意点としてはこれは生き物ではなく「能力を付与するためのアイテム」として話に登場させています。

主人公はこれを元に力をこれから誰のために使うのが次話以降の楽しみの一要因ですね。

それから「ノノリア」の存在ですが、彼女はこれ以降どうやって物語りに絡んでくるのかも楽しみにしていただけると嬉しいです。

長話しまアレですので今日はこの辺で、次話でお会いしましょう。

第三章

「んん……」

ふと目が覚めるとそこはいつも風景が視界に入った。

「あれ？ 俺はいつたい」

「あ！ 起きた！」

「お？ 鈴か……」

「んもう！ ちょく心配したんだからね！」

「ああ、すまん」

「お兄ちゃんの身に何かあったら私……私……」

今にも泣き出しそうになる鈴、俺は鈴の頭をそつと撫でてやり気を落着かせると席を外すように促す。

「ふう、よつと——」

俺は体を起こすと背筋がビキツツと軋みをたてるような音を立て激痛が走る。

「う！ つつ」

「まだ起きてはいけないわ」

部屋の扉が開くとアリスが顔を出す、俺はその顔を見るとなぜか安心すると同時にいくつかの疑問を彼女に問いかけたくなった。

「アリスか、あれからどうなったんだ？」

「ええ、リリノアは深手の重症で退いて行きましたわ」

アリスは濡らした手拭いを絞りながら俺からの問いかけに答える。

「そうか、じゃあとりあえずは助かったんだな？」

「ええ」

「ところでアリスは黒うさぎを知っているのか？」

「知ってるわ、向こう側の世界の使い魔だもの私が追い出された時に共に追い出されたの」

「そうだったのか……」

「ところで一就さん」

「一就でいいよ」

アリスは「え？」と言わんばかりに少々驚いた様子を見せたが軽く咳払いしその場を取り繕った。

「じゃあ、一就はあれほどのハンプティの力をどうやって引き出したのですか？」

「わかんね」

「は？」

「俺もわかんねーんだよな、ただお前がやられそうだって思って必死になってたら意識がぶつつりと途切れてさ」

「なるほど……」

『ようするに初めての者がハンプティを使うと一種の暴走状態になるってことだな』

「かもなあ……って、うおっ！」

突然黒うさぎが話し出したので思わず飛び上がりそうになる。

「——！！」

『おいおい、そんなに驚くほどじゃねーだろ』

骨がみしりと軋むような感覚と激痛が走り声にならない悲鳴をあげる、って言うかお前のせいだろうが……

『いや、私様も実際にハンプティを使える人間を見たことないからあん時はあー言ったが……』

「いえ、でも黒うさぎさんが言ったことはあながち間違ってはいなかったと思います」

「つと言つと？」

「ハンプティにはいろいろな種類がありそれと比例して様々な特性を持つものがあるんです、例えば一就のハンプティは磁気を操るものだと思われます。

それはあらゆる物……いえ、物に限らず人もそうなんですがこの世に存在するもの全てに対してですが磁化属性を与えることができるんです。

なので先日の場合は一就自身に磁化属性を与えることによってそれ

に反応した様々な物などが一就自身の武器になり得た…… だってころなの」

『それと私様なりに調べたんだが磁化能力はとても珍しい能力で弱点となる属性がほばないに等しいんだよな。

なぜこのような危ない代物が現実世界に流れたのかはわからないが前のお前の暴走時を見て回収しようとする向こう側の世界の者共の気持ちがあるんだがわかった気がしたわ』

「それじゃあ、アリスの傷を治したって言うのはどう説明すんだ？」

「私が思う…… あ、あくまで可能性よ？ 一就の磁化能力は恐らく細胞単位までその影響を与えることができる—— っと思われます。もっと詳しく言うと私の傷口にあった細胞はほとんどが傷ついたものそれらに一就の能力が何らかの反応をして細胞に影響を与えた、磁化させることでそれぞれの細胞が反応し合ってくっついて回復したってところかな？」

「なるほどな」

俺は寝ながらうなずく、そしてもう一点気になることがあったので聞いて見ることにした。

「アリスは人間なのか？」

「え？」

「あ、いや…… 向こう側の人間っているんだろっかってね。」

俺は地雷を踏みそうになり話題を変える、ここで気まづくなるのは俺の本意ではないからな。

「いますね、でも……」

「でも？」

「いるっていうよりはいさせられているって言うか」

「？」

『お前は神隠ししてしているか？』

黒うさが俺に問いかける、もちろんだと言わんばかりにうなずくと黒うさは話を続けた。

『そう、俗に言う神隠しにあった連中は大人子供老若男女問わずに

向こう側の世界に連れて行かれるんだ。

連れて行かれた人間はそこで女王のなすがままにコキ使われるんだ』

「そんな、じゃあ帰れる可能性は？」

「0に等しいです」

「……………」

——コンコン

話も大体わかったところでドアをノックする音と共に鈴が入ってきた。

「お兄ちゃん、そろそろご飯にするけど何がいい？」

「ああ、別に病気じゃないし何でもいいよ」

「そう？　じゃあお兄ちゃんの好物の麻婆茄子にするね」

「マジで！？　食う食う！」

「じゃあ、待っててね。」

あ、アリスさんも食べていくよね？　お兄ちゃん一人だと寂しいだろうし、食べて行ってよ」

「ありがとう、じゃあ遠慮なくいただくわ」

アリスがとても嬉しそうにするもんだから鈴もついつい頬が緩んでしまっている。

「なんかアレだな、家族が一人増えたみたいだな」

「そうですか？」

「ああ」

その後、俺たちは昼食を済ませると再び眠気が遅い静かに目を閉じるとすぐに眠りについた。

それから三日、俺たちは何の音沙汰もなく静かにすごしていた。

もちろん刺客と言う者は誰一人とせず現れず、俺は学校復帰を果たしていた。

「おはよー」

「おはよう」

登校するのは四日ぶり、俺はついこの間のできごとが嘘であったかのようにすら感じさせられていた。

教室に入るとクラスメイトたちは群がるように俺の元に駆け寄って来る。

「一就じゃないか！ ケガは大丈夫なのか？」

「私前にお見舞いに行こうとしたけれどあんたの妹が面会謝絶だつて言うから行けなかったよ、ごめんね」

などと心配してくれていたみたいで俺も「ごめんな」と皆に一声をかける。

「はい！ 皆席に着いてー！」

担任の先生が入ってくるなり皆はそれぞれの席に着くと改まった表情で驚く発言をはじめる。

「では今日から皆の新しい仲間が増えます、入って下さい」

担任がそう言うつと教室の扉が開き一人の少女が入ってきた。

「なっ！」

俺は思わず声をあげてしまった、なんてこった……。

今日の前にいるのは間違いなく制服を身に纏ったアリスだったのだ。

「鏡宮アリスと言います、皆さんこれから仲良くして下さいね」

ニコリと優しく微笑むと教室は一斉に歓喜に満ちた大歓声が沸いた、俺だけは開いた口が塞がらなかったが……

それから休み時間や昼食時間はクラスどころか他の学年にまでその美少女っぷりが広がり見に来るギャラリーが絶えなかった。

「ねえ！ 鏡宮さんってどこから来たの？」

「ねね！ 鏡宮君と同じ苗字だけどどんな関係？ 親戚？ 兄妹？」

「彼はいるの！？」

「え、えつと」

「アリス、こつちだ！」

大勢の生徒達に質問攻めにされてさすがにアリス本人が疲れ始め

たのをさすがに見かねた俺は彼女の手をとり屋上へと逃げ込んだ。

「はぁ、はぁ」

息を切らしながら屋上へと逃げ込む俺とアリス、俺はこの意味のわからない状況を把握するために彼女を問い詰めた。

「どう……言つつもり……だ？」

「はぁ、はぁ……なっ、何がです……か？」

「転校ってお前、自分でやってることわかってんのかってことだよ」
「わかってるわ、私が狙われていることも一就も狙われていることも」

「だったら——」

「だからこそよ、私も一就も互いの立場がわかっているからこそ私たちは協力関係であるべきなのよ」

「はぁ？ だから——」

「それに言っただじゃない、一就は私を守ってくれるって……あれは嘘だったの？」

「う、嘘じゃねーけど……」

確かにそんなことを言っただ覚えがある、俺は頭をくしゃくしゃと掻くと決意をするように言った。

「しゃーねえ、転校しちまったもんを辞めさせるわけにもいかねえし……ただ余計なことだけは言っくなよ？」

「う、うん！ ありがとう！ 大好きよ一就」

そう言っただけでアリスは俺に抱きついてきた、俺はこれは恥ずかしいと思い引き離そうとするが引き離せない……こいつどんな腕力してんだよ。

「わかったから離せ！ くっ苦しい！！」

ジタバタするとアリスもさすがにやりすぎたと思ったのか手を離し俺を開放すると舌を少し出して可愛さアピールをする。

「ったく……」

「ねえ？」

「んだよ？」

「一就はなんであの時私を助けてくれたの？」

「あの時って？」

「私があの時倒れそうになった時よ」

アリスはふとグラウンドを見下ろしながら俺にたずねた。

「そりゃ、お前……助けを求めている人とか困ってる人いると助けずにはいられねーだろうがよ」

「そっか、優しいのね」

ふと髪をかきあげながら振り向くアリスにどこことなく色気を感じ照れくさくなった俺は思わずそっぽをむいてしまう。

「ばっ！ バカ言っくんじゃねーって！」

「あはは、冗談よ」

「はぁ……教室戻るぞ、授業が始まっちまう」

俺とアリスは教室に戻るために屋上をあとにした、もちろんその後にはクラスメイトに嫌と言っただけで質問攻めにあつたことは言うまでもなかった。

第三章（後書き）

おはようございます、さて第三話です。

こちらは主人公の通う学校にアリスが転校と言う形で入ってくる
と言う話になってます。

これまたベタな展開ですけど、次話でアリスの本性が拝める？
かも知れません。

楽しみにしていただけると嬉しいです。

第四章

「——はあっはあ」

『急げ!』

俺は買い出しの帰り道を必死に走っていた、黒うさは俺を急かすように声を荒げて命令している。

「わぁーってるよ! 急いでんじゃねーか!」

『くそ! 油断してたわ、ここにきてこれかよ』

今日は朝から気分が悪いと訴えてきたアリスを休ませてきたのだが、まさかこんなフラグがたつなんて予想だにしていなかった。

「しっかし——はあっ暴走って……っ」

『恐らくアレだ』

黒うさは上を見ると俺も釣られて空を見上げるとそこには真っ赤な吸血鬼でも出そうな赤い月が昇っていた。

「赤い月——か」

すでに遠くから物凄い轟音が聞こえ、足には微弱ながらも振動を感じている。

「何が起こってる!?!」

『恐らく暴れてるんだろっよ、ってさっさと走れ! ボケがあ!』

俺は速度を速めて走っているがさすがにこれ以上は無理がある。

「無茶言っなよ! 俺だって生身の——ってあれ?」

『うおい! 急に止まるな!』

俺が急に止まるや黒うさは俺の肩から振り落とされそうになる。

「いい方法がある」

『は?』

俺は自分の力の事を思い出す、そうだ磁石を応用すれば……

「よし、おい腹黒」

『誰が腹黒だ!』

「俺には磁化能力があるんだよな?」

『あ？　こんなときに何を——』

「走らなくてもいい方法を思い出した、やれるかどうか分からないが……」

『だから何を！？』

「すう……行くぜ、マグニティ・ムーヴ磁化移動」

俺は自分の足に磁化属性をかけるとまるで磁石のように自分の意思とは別に磁石の力で足が動く、あとは俺のバランスさえ取れれば問題ない。

あと名前のセンスについてはなんにも言うな。

『へえ、なかなか考えるじゃないか。』

一就のくせに」

なんかバカにされてるみたいだがそんな事を気にしている場合じゃない。

『それにしたつてお前、あれ以来ハンプティ使ってないよな？』

「ああ、この能力は使いようによっちゃ……」

『大したもんだ、さすがの私様もそこまでの応用が思いつかなかったぜ』

うんうんと手をあごに当てて感心する黒うさぎ。

俺はこのままバランスをとることに集中して暫くするとこの揺れの震源地まですぐにたどり着く、そこで俺が目の当たりにしたものは——

——なんだよ……これ……

そこは倒壊した家の数々だった、あいにく人は周辺にはいないようだったがその中心部にはある人物がいることに気づく。

「あれは——！」

『アリス……狂気に魅せられたか！　ど畜生め！』

「何だよ、狂気って」

『赤い月は狂気に魅せられるって良く言うだろ？　向こう側の世界

にも月はあるしもちろんこの世界ともなんら変わらない世界だ、それが簡単に想像がついたはずなのに……失念していた』

「っち、今言ったところでしゃーねーだろ」

『これはお前に任せるしかない、やれるか？ 下手すれば死に繋がるかも知れないぞ』

死……か、だが俺が止めないと誰がやるってんだよ！

——くすくす

どこからか笑い声が聞こえる、そう彼女だ。

「あーはははっ、楽しい！ 楽しいわあ！ もっともっと！ 破壊しつくしてあげるわ！」

アリスの声はどことなく無邪気でお遊び感覚でまるでそれは子供が玩具で遊んでいるようなそんな楽しげな声をあげていた。

「やめろ！ アリス！」

「ん？ あは、一就じゃない、見てよこんなにも街があっけなく壊れていくなんて面白いわ」

「やめろ！」

俺は声を荒げてアリスを止めようとするが所詮口だけだと止まりそうにない。

「一就、私ね今すごく体が熱いの！ 心も体もふわふわっとなつてね」

「やめろって言うてんだ！ お前が今何をしているかわかってんのか！？」

「玩具で遊んでるのよ？ それがわかんないのかしら？」

アリスはくるくると軽快に回って踊ってみせた。

「こうなったら——」

「力づくって言うのかしら？ いいわ、いいわね！ 私も貴方で遊んでみたいもの！ あはっあはははは！」

アリスは真正面から大鎌を振りかぶり俺に向けて特攻してくる。

「マゲニティ・ムーヴ
磁化移動」

俺はアリスの攻撃が当たる瞬間に後方へ移動する、アリスが振り下ろした鎌はコンクリートで固められた道路をえぐりとり痛々しい爪あとを残す。

「へえ、やるじゃない」

顔をこちらに向けるとアリス、俺は蛇に睨まれる蛙のように硬直した。

なんだ、あの冷たい表情は――

今まであんな表情なんて見せなかった、それなのに……

「あはっ、使えるようになったんだね？」

「……おかげさまで」

もう少し開放してみるか？ いや、負担を考えればあまり力押ししても……後のことを考えなければ。

俺は体の不安を少し考えるがもうそんな悠長なことを言っている場合じゃない。

「次々行くよ？ ほらほら♪ あはははは！ 楽しいねー就♪」

大鎌を振り回すアリス、俺は避けることしかできなかった。

アリスを傷つけることを恐れていた、いや――

『一就！ 聞こえるか！？ 赤い月だ！ あれさえなんとかすれば！』

「はあ！？ あれをつてどうすりゃ」

「ダメだよ？ そんなの無理に決まっているもの」

アリスは困惑している俺らを嘲笑っている。

「――つく」

「じゃあね、とっておきを見せてあげるね♪」

俺の少し離れたところでアリスが大鎌を縦に持ち上げる。

「何をする気だ！？」

「行くよ？ 鎌獄（シークルプリズン）♪」

振り上げられた大鎌は縦一直線に振り下ろされると同時に行く本物の斬撃が繰り出される。

『一就！ 避ける！ あれはビルですらも一刀両断する代物だ！
防ぎようがない！』

「っちい」

俺は右へ左へと斬撃を避ける、その様を見てアリスは大声でけらと笑っていた。

「あはははは！ 一就が踊ってる〜」

くそくそくそ！ 俺はなににもできないのか！？ 人を救うとか行
っておいで俺は――

――魔銃第七十一式、三頭の魔銃――
サーベラス

どこからか聞き覚えのある声と共に突然大きな蒼い火の玉がアリスに目掛けて降り注いだ。

「な！？」

八方塞り（はっばうふさがり）になっていた俺は驚いた、今日の前に突然現れた少女は以前に俺らを襲った鏡の住人でありアリスを狙う刺客の一人リリノアだったからだ。

「お……前」

「お久しぶりね、一就さん？」

『こんな時に、何しにきやがった！？』

「あらあら、随分な言い様ですわね。
助けにきましたのに」

「は？ お前何を言って――」

最後まで言おうとするが彼女の人差し指が俺の口元にそつと当てられると片目を閉じてウインクする。

「私は貴方に興味が沸きましたの、だから助けに来たってところで
すわ」

『何を企んでいる？』

「なあ〜んにも企んでいませんわ、私が足止めをしている間にさつ
さと決着つけてさしあげてはいかがかしら？」

「……………」

どこまでが本心かなんてわからなかった、だが味方が一人でも多いほうが心強いことは確かだ。

「わかった、じゃあ任せる」

「了解ですわ」

俺たちは四散しリリノアは銃撃をしてアリスの足止めを俺は彼女に近づくチャンスを見極める、思えば今の展開は以前のリリノアの襲撃の逆だなと思った。

「あはは、そんなんじゃないわよ」

「ふん、アリスごときが私に抵抗することができるのかしら？」

「………… おもしろくない、リリノアお前ウザいよ——死んじゃえないのよ」

二人が火花を散らす、俺はふと空を見てあることに気づいた。

「雨だ……………」

『は？』

黒うさぎは意味がわからないとでも言うように小首をかしげる。

「もうすぐ雨が降る！」

そうだ、雨さえ降ってくればアリスを魅了する赤い月の影響をなくすことができるはずだ。

「じゃあ、次はこれを使ってみようかしら？ シークルダンス 鎌舞」

アリスは可憐に舞い踊る、徐々にその動きに勢いが増しながらもその身には風を纏いはじめる。

「何が始まるんだ？」

俺は彼女の動きを注視する。

「い、いけませんわ！ 一就さん！」

リリノアは銃で牽制をしながら俺に声をかける。

「どうしたってんだ！」

『こいつあやばいな……………』

「だから何が！？」

「このままだとこの近辺吹き飛びますわ！」

普段と言つかまだ二回しか会ったことがないが冷静なはずのリリノアの表情が一変する。

吹き飛ぶ？ 何か知らねーが大体想像がつく。

「冗談じゃ……」

その時だった、ポツリと小さな滴が落ちてくる。

そう雨だ、空は雨雲で覆いつくされ今まで赤く染まっていた月が隠れたのだ。

『これは——』

「雨……ですか？」

予想通りと一安心をするがまだ俺には肝心のアリスを止めると言う大仕事が残っている。

アリスは雨にうたれ始めると動きが徐々に衰え始める。

「今ですわ！ 一就さん！」

「おう！」

——俺は一気に彼女の元へと駆け出した。

第四章（後書き）

こんにちは、桜乃木 咲です。

ご愛読下さりありがとうございます。

さてさて第四章です、こちらでは赤い月に照らされたアリスが暴走して街を破壊してしまうことになります。

止めに入る一就ですが彼に止められるのでしょうか？

またこの話は戦いのシーンが主なだけに次回はい——

次話も楽しみにしていただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9381y/>

アリスの鏡界線

2011年11月29日13時48分発行